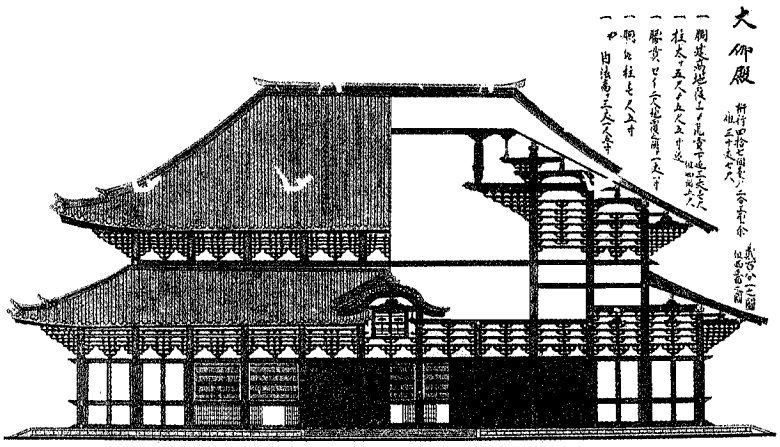
方広寺大仏殿跡

現地説明会資料



中井正知氏所蔵

２０００年８月１２日

(財)京都市埋蔵文化財研究所

方広寺大仏殿跡確認調査現地説明会資料

所 在 地　京都市東山区正面通大和大路東入茶屋町531番地
調査期間　2000年７月３日～継続中
調査面積　約340㎡
調査主体　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

１　調査の経過

今回の調査は対象地の公園化に伴う大仏殿跡の遺構確認調査です。調査地点は桃山時代に豊臣秀吉が創建した方広寺の寺域にあたります。江戸時代までは、現在の方広寺、豊国神社、京都国立博物館を含む広大な寺域を有していました。調査地および周辺部は現在も周囲より一段高くなっており大仏殿の基壇と推定され、遺構の遺存状況も良好であると考えられていました。調査の結果、大仏殿基壇上面の石敷と柱跡、大仏の台座、南面階段などを検出しました。遺構の遺存状態は大変良好で、今回ここに公開する運びとなりました。

２　方広寺について

方広寺は天正14年（1586）、豊臣秀吉が奈良の東大寺にならって大仏建立を志し、造営が開始されました。文禄４年（1595）、大仏殿はほぼ完成し高さ六丈（約18m）の木製金漆塗座像大仏が安置されましたが、翌年の慶長元年（1596）の地震によって大仏は大破。慶長３年（1598）、秀吉は大仏開眼供養を待たずに死去します。その遺志を継いだ秀頼は大仏復興をおこないますが、途中、火災に見舞われ大仏殿を焼失、慶長17年（1612）にようやく建物と大仏が完成しました。

江戸時代に描かれた洛中洛外図などを見ると、巨大な大仏殿や茶店などが建ち並び大勢の人たちで賑わう様子が描かれ、「京の大仏さん」として親しまれていたことがわかります。そして、寛政10年（1798）大仏殿は落雷によって焼失してしまいます。その後は、同じような大仏や大仏殿が再建されることはありませんでした。

方広寺の規模は史料によると南北京間百二十三間五尺二寸、東西京間九十八間一尺四寸とあり、現存する石垣から南北約260m、東西210mの規模であったと推定されます。大仏殿は西向きに建てられましたが、その位置は寺域中央のやや東よりでした。大仏殿の規模は桁行四十五間二尺七寸、梁行二十七間六尺三寸（「方広寺伽藍図」日本建築学会編『日本建築史図集』）で、基壇の四面には階段が敷設されていました。

現在、豊国神社正面には仁王門跡、寺域の西・北・南面には国の史跡に指定さ

れた石垣や梵鐘などが残っています。

また1998年度に京都国立博物館構内の発掘調査を行い、方広寺に関する南面石垣、南門、回廊跡など多くの遺構を検出しています。

3　調査成果

遺構

１区から基壇の石敷、柱跡、２区から大仏の台座、３区から柱跡、４区から南面階段などを検出しました。

石敷　基壇上面で四半敷きの石敷を検出しました。敷石は一辺60cmの正方形で、基壇の方向に対して斜格子状に敷いた、四半敷きとなっています。石の表面が赤く焼けたり、砕けているのは寛政10年に大仏殿が炎上した際に、火を受けた痕跡です。

柱跡　柱を支える礎石は残っていませんでしたが、礎石の下に設けた根固めを４ヶ所検出しました。このような根固めは、建物の重みで礎石が傾かないようにおこなった基礎工事です。根固めは検出面で径約3.6～4.2mあり、掘形内には拳大の礫と径70～100cmの大きな石を詰め込んでいます。

大仏殿の柱は直径が約1.6mもあったことが記録に残っていますが、この巨大な根固めからもその大きさが想像できます。このような柱跡を北に２間（柱間7.8m）、東に１間検出しています。

大仏の台座　建物の中央部で、径60～100cmの自然石を並べ、拳大の礫と土で一段高くなるよう盛り上げています。文献史料によればその規模は径約34m、一辺が約15mの八角形であったとされ、今回検出したのはその南端部にあたります。台座付近からは塼が出土しており、大仏の台座の上は塼敷きであったと考えられます。

南面階段　階段の一部と考えられる大きな立石を南北に２個検出しました。表面を平らに調整した石で、その位置から基壇と階段の羽目石であることがわかりました。その下では地覆石も検出しました。

また階段脇の基壇下では、焼土や炭と共に焼けた大仏瓦が多く出土しており、火災後の処理の様子がうかがわれます。

遺物

大仏殿焼失後、基壇の上はきれいに片付けられたためか、大仏殿関連の遺物はほとんど出土していません。

4　方広寺の復元

今回検出した柱跡、南面階段、基壇南端や台座などから、建物規模や台座の形、

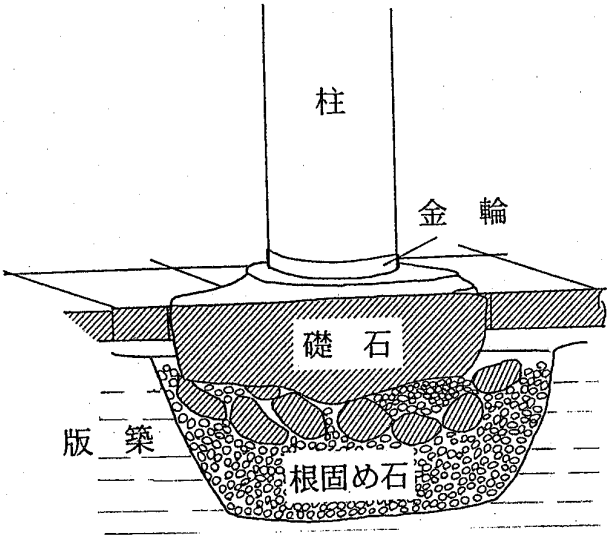
大仏の位置、建物中軸線がわかりました。これらの調査成果と現存する図面から、大仏殿の規模をほぼ明らかにすることができました。

1998年度からおこなった京都国立博物館構内の調査では、寺域南面石垣の様子や南門は八足門、回廊は複廊であったことがわかりました。さらに、南門から南に続く路面は蓮華王院（三十三間堂）南大門に続くことなどを確認しています。

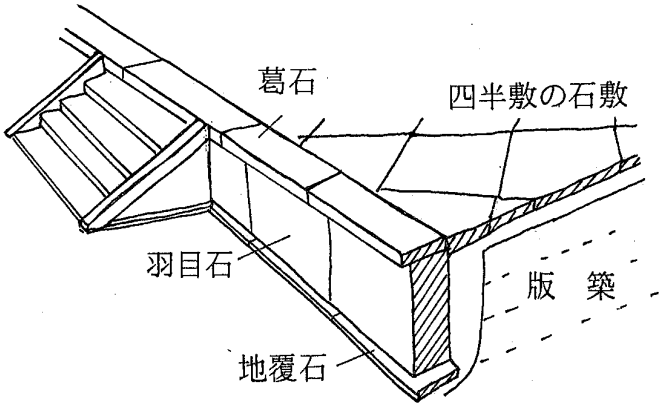
5　まとめ

調査の結果、石敷や柱跡、大仏の台座などを非常に良好な状態で検出し、方広寺の寺域や大仏殿の復元の手がかりとなる多くの資料を得ることができました。文献や絵画資料には方広寺大仏殿の規模や様子などさまざまな記載がありますが、台座は八角形をしていること、基壇上面は花崗岩の四半敷であることなどが今回新たに分かりました。

さらに今回とこれまでの調査結果から方広寺の寺域を復元することができたのは非常に大きな成果です。そして改めて方広寺や大仏殿の規模の大きさに驚かされます。



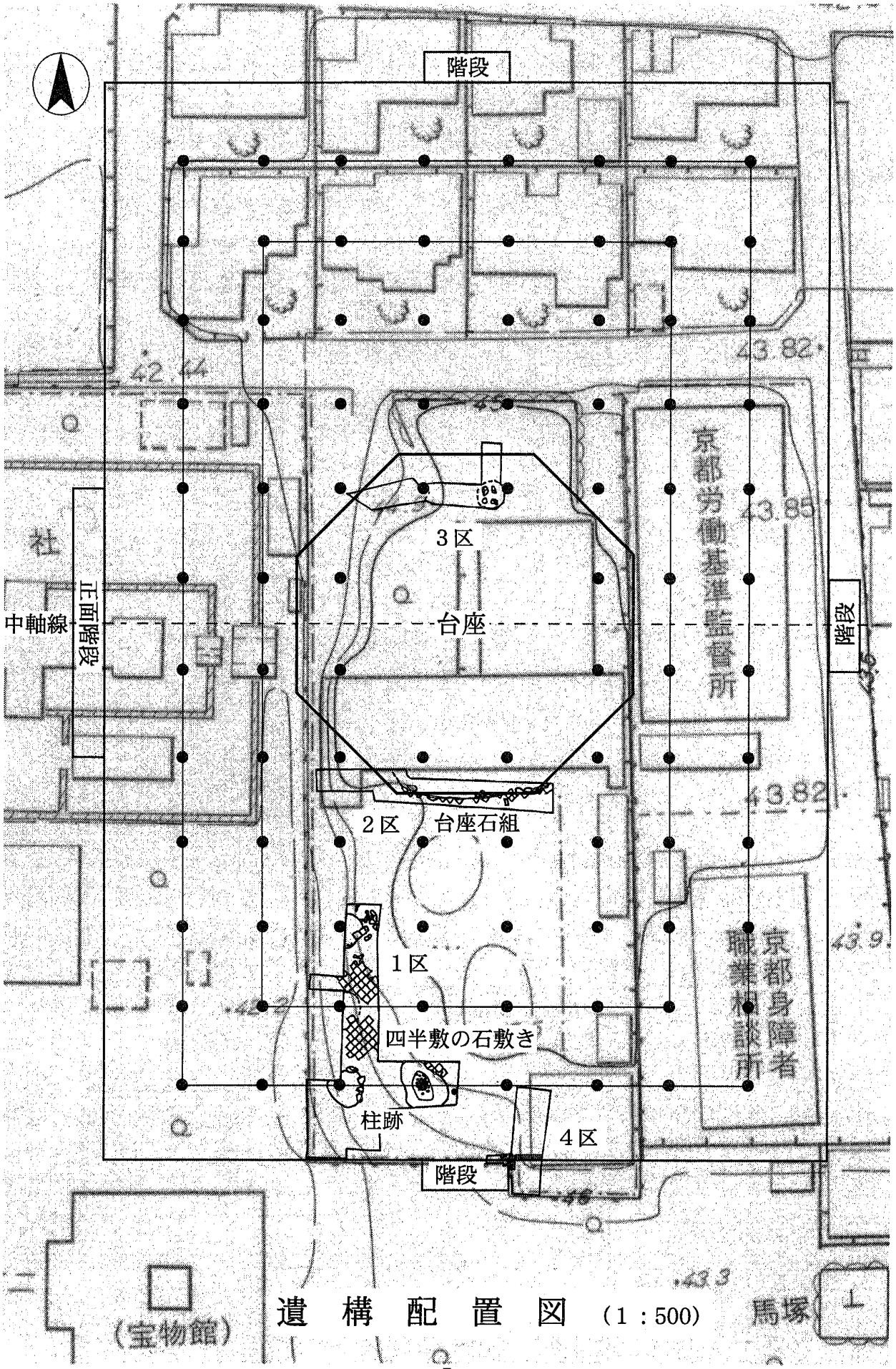
礎石据付模式図



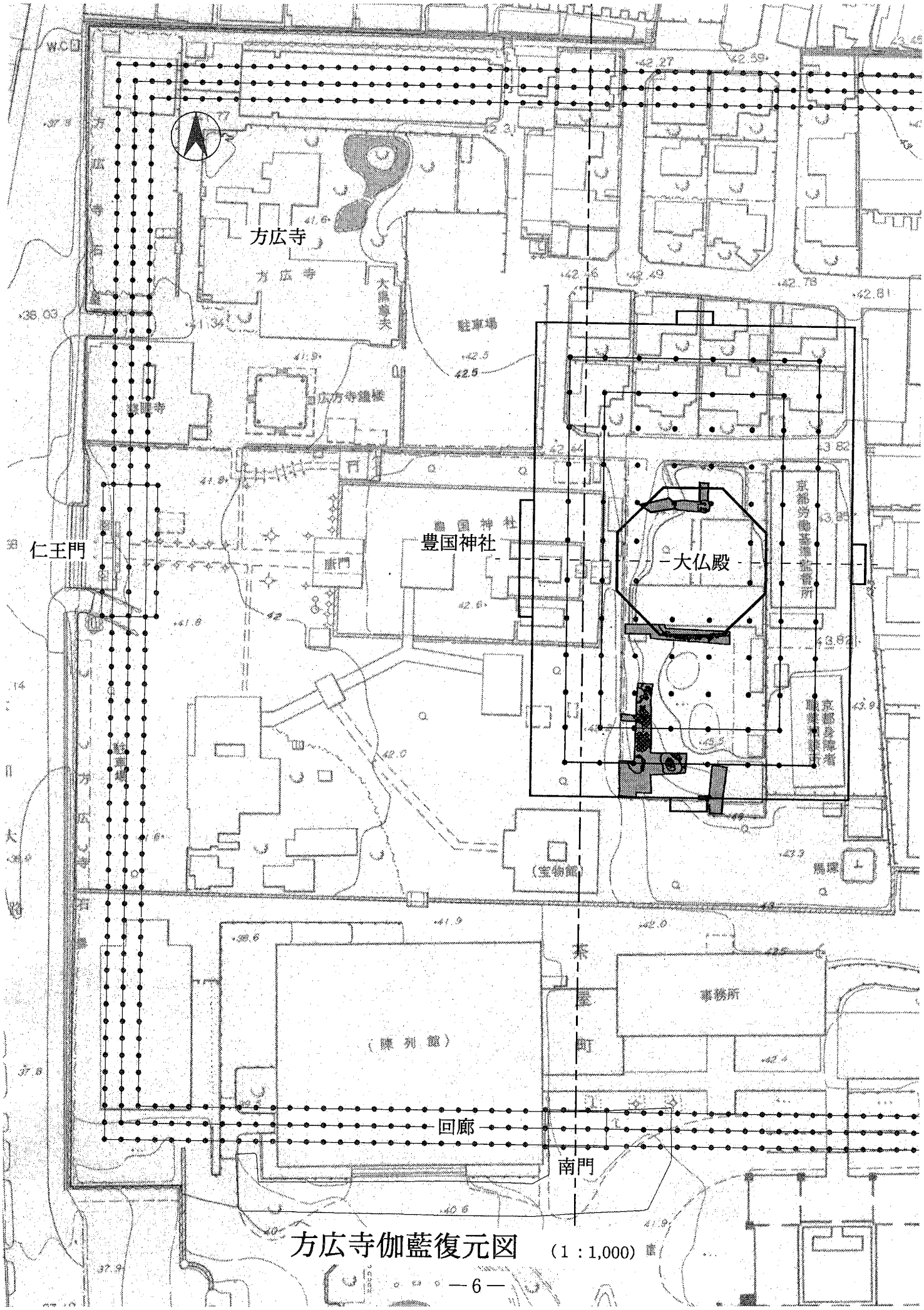
基壇化粧石の名称

豊臣秀吉・方広寺関係年表

天正13年(1585)	秀吉、関白となる。
14年(1586)	聚楽第造営開始。大仏殿建立の地を「東福寺近傍」と定め、諸大名に用材の諸国運上を命じる。秀吉、太政大臣となり豊臣姓を与えられる。
15年(1587)	聚楽第ほぼ完成し、秀吉、大坂より移る。
16年(1588)	大仏殿建立再開。 建立地を蓮華王院（三十三間堂）北側に変更。
18年(1590)	小田原攻め。天下統一完了。秀吉、京都の町割り改変に着手。
19年(1591)	大仏殿立柱・上棟式行われる。金銅仏から漆膠仏に変更。 御土居築造。同年中に完成。秀吉、関白職を譲り、太閤となる。
文禄２年(1593)	方広寺大仏殿上棟を行う。
文禄３年(1594)	伏見城完成、秀吉移る。
４年(1595)	大仏殿ほぼ完成。秀吉、父母の法会を大仏経堂で行う。
慶長元年(1596)	畿内に大地震。方広寺大仏と築地大破。伏見城も崩壊。 秀吉、大仏像にかえて善光寺如来を迎えることを命ず
２年(1597)	伏見城再建、秀吉入城する。
３年(1598)	７月善光寺如来到着するも、秀吉の容態悪化に伴い８月に送り返す。 ８月18日、秀吉伏見城にて死去。 ８月22日、如来不在のまま大仏殿で大仏開眼供養が催される。
４年(1599)	豊国社遷宮式行われる。 秀頼大仏復興を決定。大仏は金銅仏とする。
５年(1600)	方広寺大仏殿再建開始。関ケ原の戦い。
７年(1602)	鋳造中の大仏より出火、炎上。
13年(1608)	秀頼、再度大仏復興を企図。費用・用材の準備開始。
16年(1611)	６月、大仏殿地鎮祭。８月、立柱式。
17年(1612)	大仏に金箔が押され、台座・敷石など大半が完成。
19年(1614)	梵鐘完成。家康、梵鐘銘文に異議をとなえ大仏開眼供養の延期を命じる。
元和元年(1615)	大坂夏の陣。豊臣氏滅亡。
寛文２年(1662)	地震にて大仏小破。木造に造り替えられる。
７年(1667)	木造大仏及び堂社完成。
寛政10年(1798)	大仏殿に落雷、出火。本堂、楼門、大仏焼失。
天保年間 (1830～1843)	尾張國から半身の木像の大仏を造って進め安置する。
明治２年(1869)	豊国神社の再建が決定し、方広寺大仏殿境内が新社地となる。
昭和10年(1935)	豊国神社の大鳥居が完成。
昭和48年(1973)	方広寺大仏殿が火災で全焼する。


階段
3区
台座
中軸線
正面階段
階段
2区
台座石組
1区
四半敷の石敷き
柱跡
4区
階段
京都労働基準監督所
京都身障者職業相談所
(宝物館)
馬塚

遺構配置図 (1：500)



方広寺伽藍復元図　(1：1,000)